

Irène Némirovsky, *Œuvres complètes*,
2 vol., introduction, présentation et annotation des textes par Olivier Philipponnat,
Le Livre de Poche, « La Pochothèque », 2011.

小黒 昌文

没後 70 年をまえにして、イレヌ・ネミロフスキー Irène Némirovsky (1903-1942) の全集が刊行されたことを喜びたい。上下 2 巻、各 2000 ページちかい厚みの本書には、校訂者の解題を付した 65 作品が執筆年代順で収録され、各巻 8 ページずつのカラー図版が彩りを添えるとともに、年譜と参考文献一覧が下巻末に編み込まれている。

大戦間期のフランスを活動の舞台としたイレヌは、1903 年 2 月 11 日、裕福なユダヤ人銀行家の一人娘としてキエフに生を受けている。ロシア革命の争乱に追われて家族とともに 14 歳で生地を離れ、ヘルシンキとオスローでの生活を経たのちの 1919 年春、すでに幾度も訪れていたパリに移住。ソルボンヌ大学に学ぶいっぽう、華やかな都市生活を享受しつつ 20 代前半で文壇デビューを遂げた。母語のロシア語ではなく、幼少期から慣れ親しんでいたフランス語を創作言語として選び取った彼女は、15 点の小説と 50 をこえる中・短編を次々と世に問うことになる。しかし、1930 年代フランス文学界の寵児となりながら国籍取得の願いも叶わず、ヴェルディヴ事件の悲劇に先立つ 1942 年 7 月 13 日、ソーヌ＝エ＝ロワール県イッシー・レヴェック（ブルゴーニュ地方）の自宅で検挙されてアウシュヴィッツ送りとなり、同年 8 月チフスを罹患、幼い二人の娘、そして未完におわった大作の草稿を残してこの世を去っている。

その人生は決して平坦なものではなかった。生地を追われ、フランスを新たな故郷と見定めた彼女は、自らの血にまつわる災禍と、彼女の「祖国」となることを拒否したフランスの裏切りによって、無残な死のほうへと突き放されている。作家にとってはフランス語という言語だけが忠実な唯一のよりどころであり続けたとも言われる所以だ。それは不幸な子供時代——父は仕事で不在がちで、母は贅沢と享樂を追い求め娘を顧みなかった——にさす唯一の「光」であり、おおくの文学作品——ジョルジュ・サンド、エドモン・ロスタン、ユイスマンス、モーパッサン、ブルースト、モーリヤック、ブルジェ、モロワ、ラルポー、あるいはタロー兄弟——を通して彼女を魅了した救いの言語であった。そしてまた、高まる死の足音をはっきりと聞きわけながら執筆を続けたネミロフスキーにとって、それは自身の声を後代へとつなぐ唯一の手段となるべきものであったのである。

だが、終戦から 12 年ほどのあいだにいくつかの著作が死後出版されたものの、39 年という短さで暴力的に断ち切られたその生にふたたび光が当てられることはなく、後世に託された作品群もまた、十分な評価を得ることのないまま忘れ去られてしまった。

たしかに幸運な例外がなかったわけではない。たとえば、パリ文壇に鮮烈なインパクトをもたらした処女長編『ダヴィッド・ゴルデル』*David Golder* (1929) という小説がある。金融業界の高みに君臨するユダヤ人実業家の冷徹な豪腕、娘への過剰なまでの愛情、病に冒された老身と非業の死を描いた本作は、バルザックやトルストイ、ブルーストの名を想起させるとともに、刊行後すぐに、アンリ・ド・レニエ、コクトー、ブラジヤック、ケッセルらの賞賛をほしいままにした。ジュリアン・デュヴィヴィエが本作を原作として初のトーキー作品を撮影したのは、出版からわずか1年後のことである。

時をほぼ同じくして執筆された『舞踏会』*Le Bal* (1929) の評価は二分したものの、上流階級への憧れに囚われた金満家の両親、とりわけ冷たく高慢な母と年頃の娘のあいだの確執と情念を、風刺のきいた精確な筆致で描きだした短編小説の登場には「新たなコレットの到来」との呼び声も聞かれたという。本作もまた間をおかずに映画化され（ウィルヘルム・ティーレ監督、1930年公開）、当時14歳だった女優ダニエル・ダリユー映画初出演の場ともなっている。

作家の踏みだした一歩が華やかであったことは間違いない。しかし戦後のネミロフスキー受容の観点からすると、映画史との接点をもつ幸運に恵まれたこの2作品だけがかろうじて忘却を免れたというのが実状だった。状況に変化が生じたのは、ようやく2000年代に入ってからのものであり、その決定的な契機となったのは、著者の死後60年以上の時を経て2004年に刊行された未完の長編小説『フランス組曲』*Suite française* (2004) の衝撃である。

第二次大戦下のフランスを舞台とし、迫り来るドイツ軍から南方へと逃れる人びとの命運（第1部「6月の嵐」）と、ブルゴーニュの農村を舞台とした占領下の現実（第2部「ドルチェ」）を軸とした本作は、『戦争と平和』を念頭において執筆され、全5部の大作とする構想であったという。結果的には2部までの絶筆となっているが、すでに400ページにのぼる物語の充実ぶりには目を見張るものがある。

さらには、イレヌの後を追うようにアウシュヴィッツ行きとなる夫ミシェル・エプスタインの手で10歳と5歳の娘に託された「お母さんのノート」が失われることなく現代に蘇ったという事実もまた、作品への関心をひろく集めるきっかけともなった。作家が愛用したというサウスシーブルーのインクで隙間なく書きこまれた細かな文字の連なりは、推敲の時間がもはや残されていないことへの予感と覚悟を滲ませているかのようでもあり、視覚的にも極めて印象的だ（図版）。

同作は2004年度のルノード賞を受賞。死後出版の作品としては初めての栄誉に後押しされた再評価の流れは、リーヴル・ド・ポッシュやフォリオ、グラッセ社のカイエ・ルージュでの諸作品の刊行・復刊へと繋がる。全集の編纂はいわばその到達点であり、多くの読者がネミロフスキーの生と作品を体系的にとらえる可能性が、ここによりよく開かれたことができる。

ネミロフスキーの作品世界は、過去の記憶、とりわけ幼少期から少女時代にかけての想い出を重要な素材とするいっぽう——「ディケンズ風に小説化した自伝」と位置づけた『孤独のぶどう酒』*Le Vin de solitude* (1935) や、『秋の蠅』*Les Mouches d'automne* (1931) をはじめとした優れた中・短編にも多くの痕跡が認められる——、現代世界を舞台とし、自らの経験する激動の時代を冷静

に見据えようとする意志にも貫かれている。そうした特質を支えているのは、対象の本質に切り込む繊細かつ妥協のない筆致であり、感傷主義や自己満足とは無縁な眼差しであろう。

『フランス組曲』を「究極の一冊」と呼び、その魅力をいち早く日本に紹介した野崎歓の言葉を借りれば（『五感で味わうフランス文学』白水社、2005年）、それは「^{モラリスト}人性研究家の伝統につながる眼差しの冴え」であり、圧倒的な騒乱や悲劇を前にしても決してぶれることなく事態を俯瞰できる「一種透徹したクールさ」である。未完の大作は、登場人物たちの受難に対する「明晰で冷徹な憐れみ」に浸されているが、いっぽうで何気ない風景のきらめきや、陶酔をさそう花々の香りに対して開かれた鋭敏な感覚を通して、何者にも奪われることのない「精神の自由」を浮き彫りにしている。

ロシア革命とユダヤ人迫害による移民、狂乱の20年代、世界恐慌、そして第二次世界大戦の争乱を経験しながら、ただ「事実」*«facts»*のみを描こうとした作家の意図は、史実や風習を克明に描き切ることや、風刺の効いた時評を紡ぐこと、あるいは思想的主張を軸とした物語を立ち上げることにあったわけではない——「戦争は過ぎ去り、歴史に関わる部分全体が色あせるだろうということを決して忘れぬこと。1952年の、あるいは2052年の人びとの関心を引けるような事柄や議論を、可能な限り組み込むよう努めること」（1942年6月2日、『フランス組曲』草稿余白への書き込み）——。見定めるべきは、そうした特異な状況において露わになる人間の性である。ネミロフスキーの神髄は、虚飾を削ぎ落とした剥きだしの生と魂を、ひたすらに冷静な、そして穏やかだが辛辣な筆致で浮かび上がらせることにこそある。その肌触りを、まずはテキストを繙いて味わってもらいたいと思う。

そのうえで、全集とともに手に取ることをお勧めしたい文献を4点ほど挙げておく。いずれも、作家の生涯と作品について考える貴重な手がかりとなるはずだ。

- ① PHILIPPONNAT, Olivier, LEINHARDT, Patrick, *La Vie d'Irène Némirovsky*, Grasset/Denoël, 2007 ; Le Livre de Poche, 2009.
- ② GILLE, Elisabeth, *Le Mirador*, Presses de la Renaissance, 1992 ; préface de René de Ceccatty, Stock, 2000 ; Le Livre de Poche, 2012.
- ③ EPSTEIN, Denise, *Survivre et vivre, entretiens avec Clémence Boulouque*, Denoël, 2008.
- ④ *Irène Némirovsky, un destin en images*, préface d'Olivier Philipponnat, avant-propos de Jacques Fredj et Olivier Corpet, Denoël/Imec, 2010.

全集の編者が2007年に手がけた①は、未発表資料などもひろく調査した上でまとめられた、現時点でもっとも詳しい評伝であり、2009年の文庫版刊行に際してはさらに情報が更新されている。おなじ評伝の分野では、イレヌの次女エリザベートが母の声を一人称にすえて著した②も興味深い。「夢みられた回想録」との副題をもつこの「自伝」は、5歳で死別し、ほとんど知ることのできなかった母自身の記憶をたぐり寄せようとする娘の思いと、その筆致が湛える文学的な味わいを堪能すべき一冊である。

いっぽう長女ドゥニーズがクレマンس・ブルークとの対話をとおして紡いだ③は、家族の過去についての、そして悲劇の後にも営まれつづけた自らの生についての貴重な証言であり、他の資料

には見出すことのできない光を放っている。

④として挙げたのは、2010年10月から翌年3月にかけてパリ4区のショアー記念館で開催された展覧会 « Irène Némirovsky, “il me semble parfois que je suis étrangère” » にあわせて刊行されたカタログであり、作家とその家族を収めた豊富な肖像写真を中心に、『フランス組曲』刊行までの葛藤と経緯を語ったドゥニーズの証言や——母の遺稿が懐かしい思い出の品という粹をこえ、容易に緋くことのできない非常な重みを帯びていたという事実に胸をうたれる——、同作第3部として構想されつつあった「捕囚」« Captivité » に関する創作メモの一部が収められている点で貴重である。ちなみに同展覧会のホームページでは、著者初の恋愛小説『ふたり』*Deux* (1939) の刊行時にラジオで収録された、現存する唯一の肉声録音を聴くことができる [http://www.memorialdelashoah.org/upload/minisites/irene_nemirovsky/t5chap4.html 最終閲覧日：2012年9月1日]。

最後に、既存の邦訳について一言。過去に出版されたのは『舞踏会』と『ダヴィッド・ゴルデル』の2点のみだが、いずれも貴重な邦訳作品である。

前者はサマセット・モーム編纂『世界100物語』*Tellers of Tales* (1939) に収録されており、私たちはそれを辻邦生の訳文で味わうことができる（『世界100物語』第8巻「人生の観察」河出書房新社、1997年〔初訳は1961年〕）。独立した作品としてはもちろん、モームが浮かび上がらせようとした19世紀初頭以降の短編小説発展の軌跡を意識しながら味読する機会ともなるだろう。

『ダヴィッド・ゴルデル』の邦訳は、飯島正とも親交のあった映画評論家の内田岐三雄（1901-1945）が手がけたもので、原作刊行後7年足らずで出版されている（『猶太人の悲劇』西東書林、1936年）。1930年からパリ留学を経験したという内田は、封切られて間もなかったデュヴィヴィエの映画作品に出会い、翻訳を思い至ったのだろう。同書は時代を反映する重要な一冊となっている。

そして今秋には、平岡敦と野崎敏による邦訳『フランス組曲』（白水社）が刊行予定である。異邦の人イレーヌの端正なフランス語のみならず、卓抜した日本語で作品を味わえることへの期待に胸が膨らむ。本書にはフォリオ版に補遺として収められた創作ノートや書簡の翻訳も付されるときく。ぜひとも手にとっていただきたい。

[illegible]